

社会技術研究開発事業  
平成21年度研究開発実施報告書

研究開発プログラム「犯罪からの子どもの安全」

研究開発プロジェクト名

「犯罪の被害・加害防止のための対人関係能力育成プログラム開発」

小泉 令三

(福岡教育大学大学院教育学研究科教授)

## 1. 研究開発プロジェクト名

犯罪の被害・加害防止のための対人関係能力育成プログラム開発

## 2. 研究開発実施の要約

### ①研究開発目標

小中学生が犯罪の被害者や加害者にならないため、また非行少年の再犯防止のため、予防教育プログラム及び矯正教育プログラムにおいて、対人関係能力（情動的知性＝状況や他者の感情の理解、自分の感情の制御能力など）を高めることが有効であることを実証する。そのために、1)対人関係能力（情動的知性）を育成するための小・中学生用のSEL学習プログラム(社会性と情動の学習プログラム＝**Social and Emotional Learning program**、学校用は“at the school”の意味で**SEL-S**とする)を作成する、2)学校と家庭が連携して、SEL学習プログラム(**SEL-S**)を年間を通して実践する例を示す、3)矯正教育における有効なSEL学習プログラム(“for delinquency＝非行”の意味で**SEL-D**とする)を開発する、4)対人関係能力（情動的知性）の客観的な測定法を開発する、5)対人関係能力（情動的知性）の向上が、被害者・加害者にならないための自尊感情の育成、そして規範意識や規範行動の向上につながることを因果構造分析等で明らかにすることを達成目標とする。

### ②実施項目・内容

- A) SEL学習プログラムの作成
- B) SEL学習プログラムの実施と評価
- C) 犯罪・非行に関わる情動的知性（EI）概念の特定
- D) 質問紙テスト（主観的自己評定法）の開発
- E) 能力テスト（客観的評価法）の開発

### ③主な結果

- ・SEL学習プログラム(**SEL-S**)の学習ユニットを計画通りに作成した。
- ・平成22年度のSEL学習プログラム(**SEL-S**)本格実施に向けて、実践協力校と連携し、教員研修や授業研究を行うことができた。また、対人関係能力や規範意識の全般的な発達傾向を調べるために、他の関係校からの研究協力の合意を得た。
- ・犯罪・非行に関わる情動的知性（EI）概念を特定する前段階として、再犯防止用SELプログラム（**SEL-D**）の実践協力先を確保した。
- ・SEL学習プログラムの再犯防止版である**SEL-D**では、非行少年は言語的教示が理解しにくいという特性があることから、行動を通じた指導を中心にとした。
- ・再犯防止用SELプログラムに組み込む心理技法のひとつである社会生活技能訓練（**SST : Social Skills Training**）を研究開発者が修得した。
- ・予備調査の結果に基づき「主観的EI質問紙」および「コーピング質問紙」を作成した。
- ・子ども版「表情認知テスト」、「状況理解テスト」、「危険予知テスト」を作成した。

### 3. 研究開発実施の具体的内容

#### (1) 研究開発目標

小中学生が犯罪の被害者や加害者にならないため、また非行少年の再犯防止のため、予防教育プログラム及び矯正教育プログラムにおいて、対人関係能力（情動的知性＝状況や他者の感情の理解、自分の感情の制御能力など）を高めることが有効であることを実証する。そのために、1)対人関係能力（情動的知性）を育成するための小・中学生用のSEL学習プログラム(社会性と情動の学習プログラム＝Social and Emotional Learning program、学校用は“at the school”の意味でSEL-Sとする)を作成する、2)学校と家庭が連携して、SEL学習プログラム(SEL-S)を年間を通して実践する例を示す、3)矯正教育における有効なSEL学習プログラム(“for delinquency＝非行”の意味でSEL-Dとする)を開発する、4)対人関係能力（情動的知性）の客観的な測定法を開発する、5)対人関係能力（情動的知性）の向上が、被害者・加害者にならないための自尊感情の育成、そして規範意識や規範行動の向上につながることを因果構造分析等で明らかにすることを達成目標とする。

#### (2) 実施方法・実施内容

本年度の実施方法・実施内容は以下の通りである。

##### A) SEL学習プログラムの作成

本年度は、下記の計画にしたがって、犯罪・非行の被害・加害を予防するための小中学生用のSEL学習プログラムを作成した。作成に当たっては、一部の国内外の心理教育プログラムを参考にしながら、基本的にオリジナルの学習ユニットを作成するように努めた。

校種	学習ユニット群	学習ユニット数	年度別作成ユニット数（計画）		
			H20年度*	H21年度	H22年度
小学	低（1・2年）・中（3・4年）・高（5・6）学年用の3つ	18ユニット×3群 =54	10	25	19
中学	1・2・3年用の3つ	13ユニット×3群 =39	0	25	14

\*企画調査で作成

##### B) SEL学習プログラムの実施と評価

本年度は、平成22年度からの本格実施のための準備的な段階であった。そこで、本研究の実施校である公立小学校1校および公立中学校1校で教員研修を行った。また、授業研究を実施し、SELに関する教員の共通理解を図った。

次に、人間関係能力や規範意識の全般的な発達傾向を調査するために、別の関係校に、研究協力の交渉を行った。

##### C) 犯罪・非行に関わる情動的知性（EI）概念の特定

非行少年研究の本格的実施に向けて①再犯防止用SEL学習プログラム（SEL-D）の実践協力先の獲得、②既存の心理教育プログラムに関する調査を行った。

①の実施にあたっては、グループメンバーや県職員OB、県議会議員、市議会議員等による仲介で保護観察所や児童相談所、県庁を訪問し、再犯防止用SEL学習プログラム（SEL-D）の目的を説明し、プロジェクトへの参加や協力を求めた。

②の実施にあたっては、文献・資料やDVDの収集・調査に加え、神奈川、福岡、熊本などで行われた心理教育プログラムの講習会・ワークショップ等に参加し、実際にプログラムを体験して具体的手続きやその要領等を修得した。また矯正や非行臨床などの関係機関で行われているプログラムについては、本プロジェクトに参加している少年鑑別所職員からの聞き取りや法務省矯正局職員OBとの交流などで得られた情報も参考にした。

#### D) 質問紙テスト（主観的自己評定法）の開発

小学生および中学生用の「EI質問紙」と「コーピング質問紙」を開発した。EI質問紙に関しては、企画調査の結果に基づいて質問項目の選定を行った。コーピング質問紙に関しては、過去の研究で用いられている質問紙を参考にしながら、質問項目の考案、選定を行った。選ばれた質問項目の中から、平成22年度の本格実施の際に用いる質問項目を決定するために、公立小学校の児童を対象に予備調査を行った。最終的に、EI質問紙用の12項目、コーピング質問紙用の12項目を選び出し、平成22年度の本格実施時に用いる質問紙を開発した。

#### E) 能力テスト（客観的評価法）の開発

「表情認知テスト」「状況理解テスト」「危険予知テスト」の3つの能力テストを開発した。まず子どもの表情画像を使用した表情認知テストを作成するために、子どもの表情画像の撮影を行った。撮影した表情画像に対して表情評定実験を実施し、テストに用いるために適切な表情画像の選択を行った。選択された表情画像を用いて、子ども版表情認知テストを完成させた。状況理解テストに関しては、テスト課題として用いるのに適切な他者の感情喚起場面の選定を行い、テストを完成させた。危険予知テストに関しては、過去の犯罪発生状況に関する資料を参考に、テスト場面の選定を行い、テストを完成させた。

### (3) 研究開発結果・成果

平成21年度は、次年度の本格的な実施に向けた活動が中心であった。

まず、次年度小・中学校での実施の準備として、SEL学習プログラム（SEL-S）の作成と関係協力校との研究協力の合意形成を図った。その結果、小・中学生用のSEL学習プログラムについて、本年度作成分の学習ユニットが完成した。また、SEL学習プログラムの実施校との協議及び授業研究を実施し、SEL学習プログラムの共通理解を得た。さらに、対人関係能力や規範意識といった子どもの全般的な発達傾向を調査するため、他の関係校から研究協力の合意を得た。

次に、次年度より再犯防止用SEL学習プログラム（SEL-D）の開発を本格的に着手するための実践協力先の獲得と既存の心理教育プログラムの調査を行った。その結果、実践協力の同意が得られ、平成22年度の秋頃より再犯防止用SEL学習プログラムの実施が決定した。また、再犯防止用SEL学習プログラムの開発のために、既存の心理教育プログラムや対象となる非行少年の特性などを把握することができた。

最後に、上述した小・中学生用及び再犯防止用のSEL学習プログラムの効果を測定するための質問紙テストと能力テストの開発を行った。その結果、質問紙テストにおいては「EI質問紙」「コーピング質問紙」、能力テストにおいては「表情認知テスト」「状況理解テスト」「危険予知テスト」の計5種類のテストが完成した。

以下に、各グループの成果についての詳細をまとめる。

### ①SEL学習プログラム研究グループ

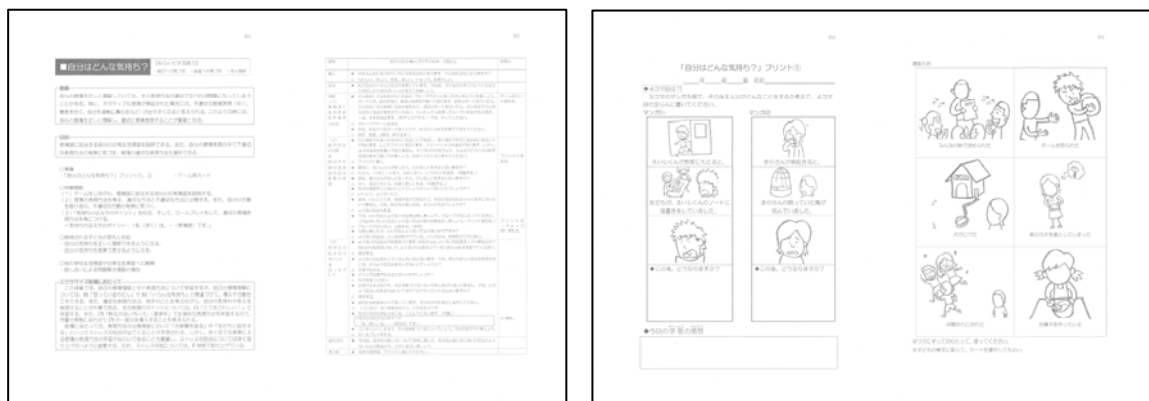
本年度は、A) SEL学習プログラム (SEL-S) の作成と、B) 平成22年度にSEL学習プログラムを実施するため準備を行った。以下、詳細を述べる。

#### A) SEL学習プログラムの作成

SEL学習プログラムの作成は、年次計画にしたがって行った。一部のユニットは既存の学習ユニットを参考にし、残りのユニットは本研究に合わせて新規に作成した。

既存の学習ユニットとは、書籍として出版されているいくつかの心理教育プログラム（心理学の知見にもとづく学習プログラム：例 社会的スキル学習、主張訓練プログラム、ストレス・マネジメント学習）から、SELの枠組みに合わせて抜粋したものである。これらを参考にSELに合うように学習のねらいをより焦点化したり、また発達段階に合わせて学習過程の改善を行い、ユニットを作成した。一方、新規に作成する学習ユニットは、基本的にオリジナル版を作成した。

SEL学習プログラムの作成にあたっては、毎週1回のグループ内協議を実施し、学習ユニットの改善・改良を図った。その際、学習のねらいに迫りやすくするために、現職教員に意見を聞く機会を設けた。各学習ユニットは、学校現場での実施を考え、小・中学校の学習指導要領を参考にSEL学習プログラムと各教科の関連を明記し、教育課程への位置づけを明確化した。また、各学習ユニットで使用するプリント、絵（紙芝居、ペープサート）、写真、ポスターなどの教材を可能な限り準備・作成した。そして、平成21年度の計画通り、小・中学校合わせて50個の学習ユニット作成が達成できた。以下、作成した学習ユニットの一部を示す。



作成した学習ユニットの一例

## B) SEL学習プログラムの実施と評価

来年度の実施に向けて、SEL学習プログラム実施校との協議・研修を行った。まず、本プロジェクト始動時の10月上旬に、実施校の校長及び関係者を集めて本プロジェクトの主旨・目的を確認した。その後、実施校の公立小学校において、SELの研修会を行った。この他、公立小学校1校が新たに実施校として加わることが決まった。

また、従来十分に検討されていない人間関係能力や規範意識の全般的な発達傾向を調査するため、他の公立小・中学校1校ずつに調査の協力依頼をし、合意を得た。

### ②非行少年研究グループ

本年度は、(1)再犯防止用SEL学習プログラム(SEL-D)の実践協力先の獲得、(2)既存の心理教育プログラムの調査を行った。以下にその詳細を述べる。

#### (1) 再犯防止用SEL学習プログラム(SEL-D)の実践協力先の獲得

平成22年度よりSEL-Dの本格的開発に着手するが、開発したSEL-Dについては非行臨床や矯正教育などのフィールドで実践し、その実効性を検証する必要がある。そのためには、実践協力先が必要であり、福岡県内の保護観察所や児童相談所等を訪問し、プロジェクトの主旨・目的の説明及び実践の協力を求めた。

その結果、福岡県内の児童自立支援施設（不良行為をなした児童を入所させ指導し、自立させることを目的とする県立の公的施設）から協力の同意が得られ、平成22年の秋頃より、SEL-Dを実践することとなった。

なお、SEL-D実践の期間、回数、対象児童などの詳細については、22年4月以降に児童自立支援施設の担当者と協議して決定する予定である。

#### (2) 既存の心理教育プログラムの調査

平成22年度より開発するSEL-Dについて、その特徴を明確にし、開発に際しての指針を得るため、既存の心理教育プログラムや非行少年の特性等について調査を行った。

これまでに学校や矯正機関に導入されている心理教育プログラムには、良好な対人関係を結ぶためのスキル（例、笑顔で挨拶、仲間に話しかける、迷惑をかけたら謝る、理由を述べて断る等）を身につける「SST：Social Skills Training（社会生活技能訓練）」や、怒りの感情を理解し、適切にコントロールする「アンガー・マネジメントプログラム」、また攻撃性を減少させ、社会適応能力を促進させる「セカンド・ステップ」や「CAP」等がある。いずれの心理教育プログラムも理論的背景や目的、対象者等に違いがあるため、働きかけるスキルや能力等も異なる。

例えば、SSTは、主に対象者の行動のレパートリーを増やし、認知能力に柔軟性をもたせ、対人関係能力の向上・改善を図るものである。しかしながら、感情面に直接働きかける訓練はほとんど取り入れられていない。また、アンガー・マネジメントプログラムは、感情の理解やコントロールに関する訓練が中心であり、行動面に働きかける訓練はほとんど取り入れられていない。また対象となる感情も怒りが中心であり、それ以外の感情に関しては十分にフォローされていない。

社会生活において対人関係能力を適切に発揮するには、行動・認知ばかりでなく、

自分や相手の感情の理解や制御、表出なども必要となる。しかしながら、従来の心理教育プログラムは、行動、認知、感情のうち、いずれかのみを扱うものがほとんどである。

その点、SEL学習プログラムは、感情面を中心に、認知・行動面まで幅広くカバーしたものになっている。自分自身の感情状態や他人の気持ちを理解する能力、感情やストレスをコントロールする能力、適切なタイミングや方法によりコミュニケーションする能力、自己に対して適切に評価する能力等を育成・向上を目指すものである。この包括性こそがSEL学習プログラムの特徴であるといえる。

本プロジェクトの目標の一つに、SEL学習プログラムにより、犯罪や非行経験のある少年の立ち直り支援や再犯防止への貢献がある。非行少年や犯罪者などには、感情や自尊心に問題があることが知られており、例えば、①自分の感情を抑えられない、②他人の気持ちを理解できない、③コミュニケーションが一方通行になりやすい、④自尊心が低すぎたり（高すぎたり）して現実的な自己評価を行えていないこと等が指摘されている。これらの問題はまさにSEL学習プログラムが育成・向上を目指す能力であり、非行少年の更生や再犯防止にはSEL学習プログラムが適していると考えられる。

しかしながら、今回の調査により、非行少年に対し、学校で実施するSEL学習プログラムをそのままの形で適用・実施するには若干問題のあることがわかった。

非行少年は、言語性知能が低いことが指摘されており、言語による教示・指導では内容の理解が困難であり、十分な効果が得られない可能性が高いと考えられる。その反面、活動性や衝動性が高く、行動面からの働きかけが有効であることが知られている。したがって、非行少年に対しては、行動から入る技法がより効果を上げやすいとの指摘がある。

そこで、SEL-Dの開発にあたっては、行動に直接働きかけるSSTの技法を基本に据えることにする。つまり、行動の変化を通じて、それに伴う認知や感情の変化に気づかせるという方法を取り入れる。その結果、感情機能の不全（自分の感情状態をモニタリングできない、他人の心の痛みがわからない）や反社会的思考（誰でもやっていること、相手が睨んだから殴った）も変化することが期待される。

以上の調査結果より、SEL学習プログラムの位置づけやSEL-Dを開発するにあたっての全体的な指針が明確になった。

### ③測定技法研究グループ

本年度は、次年度からの本格実施に向けて、D) 質問紙テスト（主観的自己評定法）の開発と、E) 能力テスト（客観的評価法）の開発を行った。

#### D) 質問紙テスト（主観的自己評定法）の開発

小学生および中学生用の「EI質問紙」と「コーピング質問紙」を開発した。

EI質問紙に関しては企画調査に基づいて、一方のコーピング質問紙に関しては過去の研究を参考に質問項目の考案、選定を行った。EI質問紙では24項目、コーピング質問紙では18項目を選び出し、公立小学校5年生を対象に予備調査を行った。その結果、EI質問紙では「自己感情の表現」「他者感情の認知」「自己感情の制御」の3つのEI能力の存在が明らかになり、コーピング質問紙では「サポート希求」「問題

解決」「行動的・情動的回避」「気分転換」の4つのコーピングの存在が明らかになった。

この予備調査で得られたデータを用いて、小学生のEI能力とコーピングの関係について分析を行った。分析の結果、他者感情の認知のEI能力が高い児童ほど、ストレスを感じた時に、誰かのサポートを求める、また、ストレス問題の解決に積極的に取り組もうとすることが明らかになった。そのほかに、自己感情の制御のEI能力が低い児童は、行動的・情動的回避コーピングを行うことが示された。これらの結果から、EI能力とストレスコーピングの間に関連があることが示された。

表 EI能力とコーピングの相関分析

	コーピング質問紙			
	サポート希求	問題解決	行動的・情動的回避	気分転換
EI質問紙				
他者感情の認知	0.379 **	0.525 **	-0.139	-0.097
自己感情の表現	0.115	0.162	0.052	0.074
自己感情の制御	0.072	0.071	-0.224 *	-0.030

+ p<.10, \* p<.05, \*\* p<.01

以上の調査結果に基づいて、最終的に、EI質問紙、コーピング質問紙それぞれ12項目を次年度の本格実施の際に用いる項目として選択した。

#### E) 能力テスト（客観的評価法）の開発

子ども版「表情認知テスト」「状況理解テスト」「危険予知テスト」を開発した。

子ども版表情認知テストの開発に先立ち、テストに用いる子どもの表情写真の撮影、表情画像データベースの構築を行った。小学校6年生、中学校1年生の男子53名、女子54名計107名について、「真顔」「喜び」「怒り」「驚き」「悲しみ」の5表情の撮影を行った。さらに撮影した表情画像から、どの程度、各表情を読み取れるかを調べるために表情評定実験を行ってデータベースを構築した。このデータベースの中からテストに適当な表情画像を選択して、子ども版表情認知テストを作成した。

状況理解テストに関しては、過去の研究に基づいて、他者の感情喚起場面の選択を行った。テスト状況としては、ネガティブな感情を推測させる状況とポジティブな感情を推測させる状況の2つのテスト場面を作成した。

危険予知テストに関しては、過去の統計資料を参考に、子どもが犯罪に巻き込まれる危険な場面として「道路上」を選択し、実際に、道路上での場面撮影を行って、テスト場面を作成した。

以下に、状況理解テストおよび危険予知テストの例を示す。



状況理解テストの例



危険予知テストの例

以上の通り、開発した3つの能力テストを、次年度の本格実施の際に用いるテストとして準備した。

(4) 開催したワークショップ、シンポジウム、会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
2009年 10月10日	平成21年度連絡協議会	福岡教育大学	関係者による協議会の立ち上げ会議
2009年 11月8日	第1回非行少年研究グループ検討会	福岡大学	H21年度の非行少年研究グループの実施課題、実践協力先の依頼
2009年 12月4日	第1回グループリーダー会議	福岡大学	各グループの進捗状況報告、領域合宿報告
2010年 2月16日	第2回非行少年研究グループ検討会	福岡大学	非行少年研究グループメンバーへの進捗状況報告、H22年度の実施計画の検討、非行少年に必要なスキルについての意見交換
2010年 2月19日	第2回グループリーダー会議	九州大学	各グループの進捗状況報告、研修会参加報告、第3回「犯罪からの子どもの安全」シンポジウムの内容確認、H22年度研究計画検討
2010年 3月31日	日本情報ディレクター学会九州支部・認定心理士会九州支部共催シンポジウム	福岡アクロス	『頭の良さとは何か？：社会で生きる頭とそうでない頭』と題するシンポジウムにおいて、箱田が「情動的知性—その測定と問題点」について話題提供

(5) 研究開発実施におけるその他の活動

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

5. 研究開発実施体制

(1) SEL学習プログラム研究グループ

- ① リーダー名 小泉令三 (福岡教育大学大学院教育学研究科)
- ② 実施項目
  - A) SEL学習プログラムの作成
  - B) SEL学習プログラムの実施と評価

(2) 非行少年研究グループ

- ① リーダー名 大上 渉 (福岡大学人文学部文化学科)
- ② 実施項目
  - C) 犯罪・非行に関わる情動的知性 (EI) 概念の特定

(3) 測定技法研究グループ

- ① リーダー名 箱田裕司 (九州大学大学院人間環境学研究院)
- ② 実施項目
  - D) 質問紙テスト (主観的自己評価法) の開発
  - E) 能力テスト (客観的評価法) の開発

6. 研究開発実施者

① SEL学習プログラム研究グループ (テーマ別)

氏名	所属	役職
小泉 令三	福岡教育大学	教授
田中 展史	福岡市教育委員会	指導主事
久保田 和子	福岡市立若宮小学校	校長
小松 直人	福岡県岡垣町立岡垣 中学校	校長
山田 洋平	福岡教育大学	時間雇用職員

② 非行少年研究グループ（テーマ別）

氏名	所属	役職
大上 渉	福岡大学	講師
瀬里 徳子	福岡市こども総合相談センター	相談課長
松本 亜紀	福岡医療福祉大学	助教
栗野 美穂	福岡保護観察所	保護観察官

③ 測定技法研究グループ（テーマ別）

氏名	所属	役職
箱田 裕司	九州大学	教授
中村 知靖	九州大学	准教授
小松 佐穂子	九州大学	学術研究員
大上 八潮	九州大学	非常勤研究員
井上 智子	九州大学	事務補佐員
蒲池 みゆき	工学院大学	准教授

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 論文発表

(国内誌\_\_\_\_件、国際誌\_\_\_\_件)

(2) 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

①招待講演 (国内会議 1 件、国際会議\_\_\_\_件)

②口頭講演 (国内会議\_\_\_\_件、国際会議\_\_\_\_件)

③ポスター発表 (国内会議 2 件、国際会議\_\_\_\_件)

箱田裕司、“情動的知性—その測定と 問題点” 日本情報ディレクトリ学会九州支部・認定心理士会九州支部共催シンポジウム『頭の良さとは何か? : 社会で生きる頭とそうでない頭』、アクロス福岡、2010年3月.

小松佐穂子・箱田裕司、表情と人物の選択的注意課題とEI、日本心理学会第73回大会、立命館大学、2009年8月.

小松佐穂子・箱田裕司 情動性知能と表情認知の関係—質問紙および表情認知検査による検討—、九州心理学会第70回大会、佐賀大学、2009年12月

(3) 新聞報道・投稿、受賞

①新聞報道・投稿

②受賞

(4) その他の発表・発信状況、アウトリーチ活動など